

## ムラ業からマチ業へ

中谷健太郎\*

### I 環境問題

私は、医療とも学問ともあまり関係なく、湯布院という町で宿屋を営んでいます。それ以前は東京の東宝撮影所で演出の手伝いをしていました。森繁久弥さんや小林桂樹さんが張り切って社長ものをやっておられた頃です。1人の黒澤明を支えているのは俺たち40人のスタッフだと、うそぶいていたものでした。

いま宿屋には12しか部屋がないのに、100人のスタッフに支えられて生き延びています。その100人が、自分の腕でもって生きていける場をつくろうとしてこの30年間ゴチャゴチャとやってきました。それを他の人が「村おこし」とか「町づくり」とかと名前をつけて呼び始めていますが、私どもにはそのような意識はありません。ただお客様はここ10年くらいの間で急激に増えて、入り込み客も宿泊客も3倍くらいになっています。その意味では町が活性してきたといえなくもないのですが、定住人口は一向に増えません。定住1万2000人の町は30年間人口に変化なく、入り込み客だけが年間360万人から今年には400万人になろうとしており、宿泊客は70万人から100万人近くになりました。これはもう狂気の沙汰です。狂気の沙汰の中で「環境問題」が起こらないはずがないのです。

町づくりでは成功例として取り沙汰されていますが、これだけ急激な変化に

---

\* 湯布院亀の井別荘主人

さらされて、町が「よいことづくめ」でやってゆけるはずがありません。

## イ) 深い傷

湯布院は風光明媚な「美しい農村観光地」といわれていますが、一昨年九州を襲った台風によって山林の相当の部分が壊滅的な状態になりました。樹の種類はほとんどが杉でした。この杉については機会あるごとに「あれは危ないぞ」と言い続けてきたのですが、受け入れられませんでした。素人の寝言だということです。「お前たちが山紫水明を謳えるのも、わしらが杉の木を植えて枝打ちして汗を流してるからだぞ」。それはそうとしても、あれはいかにも不自然です。一望、緑の杉ばかり、というのは……。昔の雑木だらけの混植林にしよう、雑木林は雑木なりに利用して木工、すなわち木を使った産業を興そうと主張し続けて15年くらいが経過しました。2年前ようやく木工の師匠、時松辰夫氏を私たちの手で引き抜き、というよりも乞い願うてこの町に住んでいただき、ようやく雑木木工が始まったところです。そこから山が変わり始めます。それには100年かかると思いますが、長生きしても間に合いません。

## ロ) 山から海へ

山の問題は山だけにとどまらず、川にもつながっています。たとえば「川が汚れる」という場合、人が川に汚物を流す、ということのほか、川の堰堤が三面、コンクリートで貼りあげられているという状況があります。これでは水の中の微生物や虫たちが生きられません。かれらは川石の蔭や穴ぼこに潜んで生きるのですから……。かれらは川の掃除屋です。かれらが川を浄化するんです。それがいなくなれば川は汚れる。それに人間も水に親しまなくなります。朝晩水に触れて、親しんでこそ水をキレイにする気分にもなるのです。はるか眼の下をコンクリートに囲まれて流れている水ではそんな気にならないでしょう。それでも大げさな河川工事がなされ続けるのはなぜか？ 実際に洪水が起るからです。なぜ起るか？ いろいろの理由がありますが、土地の保水力、すなわち水を保つ力が弱っていることが原因と第一にいわれます。田んぼが減

り、道路も、庭坪でさえもが車の都合に合わせて舗装され、広大な山地一面は山林農家によって杉が植えられ、野原は畜産農家によって牧草が栽培される。いずれも土地の上っ面を雨水が一気に流れるようにしつらえられ、それが60~70年も続いているのです。山に緑の杉が茂り、野原に牧草が敷き詰められ、みごとに手入れをされた田畑がみはるかす限りに広がるという、まるで桃源境のようにみえるムラの景色も、芯このところではずいぶん自然を傷つけ、ゆがめてきているのです。それが自然界のバランスの限界を超えているかどうかは別として……。自然と産業の問題はこの限界を見直すところから始めなければならないと思います。

#### ハ) 自然・観光・農業

私が言いたいのは「自然と調和する観光地」というベタ甘の評価などは放っておくとしても、「観光化が進むと農村が壊れる、農村が壊れると自然が破壊される」という三段論法はオカシイということです。もちろん観光化が進んでも農村は壊れないし、農村が壊れても自然は破壊されません。そんなことは自明です。この「風が吹くと桶屋が儲かる」式の論議に腹が立つのは、原因と結果を巧妙に結びつけて観光と農業と自然とを各々に孤立させ、敵対させている点です。農村が壊れるのは観光のためではないし、また、自然が壊れるのも農業の不調のためではありません。観光であれ、農業であれ、よいものはよい、ダメなものはダメです。どれも同じ人間の営みなものだから業種によって良い悪いがあるはずがない。それよりも今は、観光とか、農業とか、自然とかをバラバラに考えないで、ひとつの関係体として総括的に考え直す時だと思います。自然と、農業と、観光と、何と、どれと、というふうに様々にみえる相をキッチリとみすかして、各々を全体と関係づけて創り直す時でしょう。それなのに、私の町では各々がバラバラのままに手探りしている状況です。業種や地区を超えて町の全体像をみる、といった意志はまことに薄い。私は町民と行政とがキッチリと腕を組めば、かなり巧くやれると思うのですが、現実はそううまくはいきません。

## 二) 前へ進め

さて土地の保水力が弱ってきているから雨水は洪水となり、三面コンクリートの川を走って一気に海に去る。地下水も少しずつ減っていき、温泉も同じ状況です。そんな中で田んぼはしだいに姿を消し、山林の杉は台風と外材輸入で壊滅状態、原野は牛を失って役立たずの土地と化し、そこに観光資本御用の別荘やゴルフ場が乗り込んでくる。マチの環境は大きくきしみながら変身しています。そんな中で、私たちは何とか新しい状況を創り出すほかありません。引き返せばよいということではないのですから前に進むほかはないのです。

風光明媚な農村観光地として成功事例に挙げられる私の町も、環境的には以上のような状況です。米一本でやってきた貧しい隠れキリシタンの里が、地球上の一生活区域として今まっとうに蘇ろうとしている、と私は考えています。これからの道程は「壊れゆくものの悲しみ」ではなくて「生み出してゆくものの喜び」に貫かれていると思うのです。ですから環境はきっとよくなるのです。

## II 行動変容

さて行動変容ですが、環境がこれだけ大変身を遂げている中で人間の行動が変わらないはずがありません。その反応は様々ですが乱暴な割り切り方をしてしまえば、人間は環境や状況が変わるとそれに合わせて「自分を変えていこう」とし、同時に「環境・状況を変えていこう」とする、といえます。この両方をやり通せる場が町の中にあるかどうか、それを町の中に創り出していけるかどうかはその町のダイナミズムを決定します。そしてこの行動はしばしばひとつの行動の中に実現する、つまりひとつをやればほかのひとつも実る、といったケースが多いのです。

### イ) ゴチャマゼ

私たちの例でいうと、20年近く室内楽が中心の音楽祭をやってきました。大

きなホールもなく、あったとしてもそれを使いこなしていく体力も金力もない。だから室内楽にしたのです。室内楽なら5人から10人くらいの演奏家とおつき合いすることで何とかやっていける。それで気持ちよくやってこれたのですが内情は大変でした。室内楽はバッハや、モーツァルトやベートーベンを演奏するのですが、これは地元には合いません。なにせ地元では盆踊りの口説、演歌、神楽囃子、太鼓、カラオケ、ロックンロールなのですから……。バッハはよそ者の歌である。もちろんバッハは17～18世紀のドイツの作曲家だからよそ者ではありますが、それを聴こうという人たちの中に町の人がきわめて少ない。よそ者の曲をよそ者が演奏して、しかもよそ者がそれを聴くというのであれば、それはもう「わが町の音楽祭といえんぜ」というのが当時の町側の大方の反応でした。それでも私たちはそれをやりたかったのです。「わが町の音楽祭」とはいえないものの中から「新しい町の音楽祭」が生まれる可能性もあります。町の文化も環境や状況に合わせて活き活きと新鮮なものに変身し続けてほしいと私たちは思ったのです。

それでどうしたかといえば、町の小学校の先生を口説き、会場で生徒たちに縦笛やタンバリン、木琴を演奏してもらい、そのバックを九州交響楽団のメンバーがサポートするというものでした。「本職の楽団をバックに生徒が演奏する——ここから私たちの室内楽の祭りは出発しました。題して「ゆふいん子供音楽祭」。1日だけそれをやって残り3日をバッハの「ブランデンブルク協奏曲NO.5」や、ベートーベンの「ラズモフスキー」を演奏しました。それでも聴衆が少ないため、自衛隊の軍楽隊メンバーに制服を脱いで客席に坐ってもらったり、隣街のアマチュア・コーラスを前座に招待して、その家族や仲間に切符を売りつけるようなこともやってきました。ヘンテコリンな演奏会の雰囲気でしたが、地元と地元外の文化が混じり合う過程であり、このプロセスをしっかりと経ないと、保守エネルギーと革新エネルギーがブツツンして町はダンマリの膠着状態になってしまいます。状況と精神とが溶け合わなくて、ギシギシときしむのです。10年を超える頃からさすがにそれも収まって、19回目を迎える今年あたりはかなり自由になっていますが、それはそれでまた別の問題を引き起こ

すようになります。つまり安定（定着）するのです。

## ロ) 安定厄介

このように安定すると関係者も特定の人に限られ、「音楽祭一派」という人種が生まれてきます。彼らを含んで町が多様になってくると、都市のように豊かにもなるのですが、一方で全体のエネルギーは落ちてきます。「恒例の音楽祭がまたやって参りました」と、いつもの面々の挨拶で祭りが始まり、いつもの人々が善意をみなぎらせて手伝うのだけれども、町全体は大して盛りあがらない。状況も環境もそのようなことで追いつけるほどヤワな変わり方ではありません。もっとスピーディに緊張感に満ちて、山が壊れ、売られ、川が汚れ、米作り農業が衰え、ムラ人は藁をもつかむ気持ちで他の産業を模索し、それがまた知らぬうちに大事な何かを壊している。よそから入ってくる物流や文化、思想をどう受けとめ、どう呑み込み、消化して、私たちのものとして創り直し、この先自然や異人や異文化とどう交わり、どう共生していくか、そういった目の前の課題に対して安定した音楽祭が何ほどのことをなし得るか？ 音楽祭を安定させることに向かって19年間努力してきたけれども、安定してしまえばそこで終わりです。膠着して排他的になって勢いが死んでしまいます。それでまた別の新しい動きを模索し始めるのです。今は500席のホールを建設して、その周囲に文化活動の拠点を集集させよう、という運動を始めようとしているところです。ホールを成り立たせるためには音楽催事だけでは消化しきれないので、いろんな文化活動を引っ張り込まなければなりません。そこで関係者に会って事の次第や考えをしっかりと伝え、その関係者を次第に理解者に育てあげ、さらに運動者に仕立てあげてゆく。もちろん町当局ともしっかりと手を組んで音楽、美術、料理、図書館、演劇、映画、町づくり等々の総合文化センターに仕立てていくのです。ここで難しいのは、行政の窓口を社会教育課にしないで企画課か商工観光課にできるかどうか、ということです。社会教育課では町内向けにじんわりと催事を組むことはできますが、そのかわりに視点が町内を出ることがなく、町民向けのゴキゲンとり建造物になってしまうおそれがあります。

たとえば図書館は400年前の町の歴史をたどって、「南蛮文化図書館」に絞り込み、先々には世界につながる図書館にしていくなどということはできそうにありません。在住者、あるいは関係者の作品発表を重視せよ、という声は今も聞こえてきます。音楽祭も映画祭も子供向けのものを望むアンケートが断然多いのです。考えてみると「文化」という毒素を含んだ解体と創造の冒険行為を「社会教育」という優良安泰継続をつかさどる窓口に預ける、ということ自体が土台無理なのかもしれません。文化総合センターも新しい行政の視点で取り組めば町民の様々の利害や意向をおもんばかりの厄介から解放され、「外の世界」との関係の中で、しっかりと土地に根の生えた文化を育ててゆくことができるのではないのでしょうか。

## ハ) 変身

こうしてあの手、この手で音楽祭の状況を変えていくうちに、私自身の中身も変わってきました。「あいつはあいつだ」という評価が固まってきています。自分のお尻の形にちょうど合った穴ぼこができたのです。そこにぴったりと坐ってしまえば、もう人畜無害の横丁の文化隠居になってしまう。それではたまらないので穴からまたさまよい出て、新しいアプローチを始めています。異人が常人になり、また異人になり、そんな変化の中で町も変わるのです。クラシックという変な音楽と、それを看板にする奇妙な住民のいる町が、さらに変身してクラシックが当り前の町となる。そして私も「文句あるか」というような横着な確かさを手に入れてまた次の変身を試みる——。といった具合です。私はいま、すべての公職や組織の役職を辞めて、月2回「西風の日」というフリートークの場を提供しています。場所を提供するだけでこちらからは決まったテーマや仕掛けはせず、各々が自分たちのテーマをもって早い者勝ちにその日を占拠するというものです。早くテーマを出したものがその日のヘゲモニーをとるというわけで、ホットなニュースや町の動きがわかるというので好評ようです。駅舎を磯崎新氏に設計していただいた時や、城ヶ岳の広大な原野が売却されてゴルフ場となるといった事件の時はなかなか盛り上がったのです

が、ふだんは音楽や映画や福祉、あるいは町づくり全般の話で缶ビールがはける程度のもので、原則として実践活動はせず、活動は各々のグループで各々の考えでやる、ここは思想を鍛える場であって運動を展開するところではない、というのが会の建て前です。この建て前のおかげで時に役場の職員も交じえながら青年たちからジジババまで、共産党も右翼も、クラシックファンもロッカーも集まって話し合っています。私がしていることは、場所の提供と簡単な記録と参加者のひと口メモをまとめて各自に返送することだけ。ほかには蓄音機でSPレコードを聴かせる程度です。

### III ストックとフロー

私が最初にレコードを聴いたのは50年ほど前で、小学校に上がるか上がらずの頃です。隣の老人が古めかしい木の箱のネジを捲いて小さな竹の針をカッターで切り、円盤をのせてフタをすると奇妙な音が箱の布地から静かにただよってくる。それがSPレコードだったわけで、その後東京で生の演奏<sup>なま</sup>を聴いて仰天したり、NHKの土曜コンサートで手が赤くなるほど拍手したりした経験はすべてここから出発したのです。それで今でも、SPレコードに入れあげています。世の中、CDや生演奏であふれ返っていて、何やら八重桜と提灯桜と一緒に咲いたような風情ですが、そんな中で私は少々ヘソを曲げ、地の中にもぐって根を肥やそうと思ってしまうのです。地上で幹が肥り、枝がしげり、花が咲く時はその分だけ地下の根が深く、きめ細かく、土にもぐって肥え太らなくてははいけないと思うのです。その土の部分がめっきり痩せてきているのは、根を肥らすことや花を咲かせることに比べて価値があることだとみられなくなってきている証拠です。社会の表面に合わせ、あるいは流されるような行動がはびこる中では、根っこの部分（ストック）はしだいに弱くなっていき、花の部分（フロー）が流行するのです。しかし一方では地上やマスコミの明かりにさらされない個人史的な生活行動が、しっかり頑張って、社会の行動規範や価値観の中に根を張っていると思います。その根っこの部分を強いものにしてい



かなければと思うのです。それでSPレコードを町の人に強制的に聴かせるのです。この部分を担当するのは社会の中のどの部署であり、どの人たちなのか？学校はもちろん熱心じゃないし、義務教育ではほとんど無視されています。企業内でも先端を手探ることは奨励されても、個人の底に眠るワクワクする気分を育てるような行動はおいてけぼりでしょう。家庭ではそれに輪がかかかっていて、ジッチャマ、バッチャマは、蓄積された自分の歴史を捨て去り、自信を失い、片隅にひっそりと生きている人が多いように思います。そのようなわけで私はあらゆる組織を脱け、個人のワクワク気分の根っこをつないでいくことに夢中になっています。それで組織の役職の中にいた時の何十倍も忙しくなったのですが、みんなあきれて、私に「あんたは病気じゃ」と言ってくれます。

## IV あり余る土地

### 1) 過疎

先ほど環境がどんどん変わってきた、あるいは私たちが変えてきたけれども、その中で私たちも何とか環境とのバランスを取り戻そうと努力している、と言いました。それは異人、異物、異質のものと交わりながらそれらを呑み込み、みずからも変身、変態を繰り返しながら、環境そのものを変えてゆくということです。その根っこは個人のワクワクする気分や、かけがえのない大事であって、それらを確かめ合い、強め合いながら一緒に生きていこうとしているのです。

ところでその環境は人の手が入り過ぎて壊れる場合と、手が足りなくて荒れていく場合があります。杉の単一林や栽培牧草地やゴルフ場、別荘地等は前者の例でわかりやすい。しかしわかりづらいのは後者の場合で、人手が足りないために土地が荒れていくケースです。

たとえば農家の働き手が少ないために、杉山の間伐や枝打ちなど管理ができません。これが杉の値段を下げ、さらに山の地盤を弱いものにする。また、牧野

を焼いてダニを殺し、自然の牧草を芽吹かせる、いわゆる「野焼き」の作業ができないために、牧野や採草場が荒れて陳腐化してゆく。山や草原から人影がしだいに遠のき、かつての共有財産は荒地、あるいは過疎地とよばれる無用の土地に変わっていく。そこに新しい産業としてリゾート資本等が入ってくるのだけれど、それが自然環境や文化環境に馴染んで新しいバランスを得るようになるまでに、実に多くのものが壊され、中には蘇生不能のものもかなりあるのです。

## ロ) 地方の豊かさ

それでは地方はどうしようもなく貧しいか、というとそんなことはなくて実に豊かなのです。あるいは豊かな可能性をもっているといってもよい。少なくとも私たちが生活観光地という惹句で町にかかわってきて、現在、年間400万人の入り込み客があるということは町の生活そのものにながしかの魅力の種があるということでしょう。それを今後どう芽生えさせ、実らせていくかということが私たちの仕事です。

そこでひとつの可能性は「過疎」の中に潜んでいると思います。わが町は摺り鉢型の盆地で、その部分が大いに繁昌しています。しかし、盆地の周辺には広大な未利用地が広がり、その広さは現在利用されている土地の約10倍です。かつて山林牧野とよばれた土地が、今は荒地、過疎地とよばれて売りに出されている。こうした土地こそが新しい可能性を秘めていると思うのです。なにしろ利用されていないのだから、新しい利用が可能なのは当然です。

東の山の原っぱは子供の頃の野球場でした。北の山の萱場は牛の餌切場で、私は非農家でしたから行きませんでした。友だちは毎朝、萱場まで餌草切りに行ったものです。昔を懐かしんで繰り返し言を言っているわけではありませんが、南の山の向こうの過疎のムラは苺の群生地だったことを思うにつけ、かつて生き活きと活用されていた広大な土地が、今日、ほとんど見向かれもせず放置され、売りに出されているのは悲しいことです。宅地周辺の土地はびっくりするほど値が上がり兎小屋ほどの家しか建てられない、農業などやれたものではな

いいいます。結局、人間の行動能力が落ちて、天から与えられた土地を活用できなくなっているということの証しだと思います。その土地で年間いくら生産高をあげるかという仕掛けだけを考えるのではなく、水や空気や、土といった最も大事なものをまっとうに生産し続けるシステムを創るために、私たちは新しい価値観を身につけてこの「荒地」に向き合わなければならない時です。

## V ムラ業からマチ業へ

結論からいえば、米を作る単純な産業構造から脱け出て別のものに変身しようとしている過程でのギクシャクが私たちの厄介事なのです。

しかしその厄介事は社会にとって必要悪であり、それがなければ生命のんびりと安泰して私たちは死に絶えてしまうかもしれない。そう思えば世間を変える厄介も、自分が変わる面倒もともに愉しからずや、と思えてきます。

そこで、米作りの単純作業からどういう産業に変わるのかと聞かれると、それはわかりません。複雑、多岐、不明、多様で、一筋縄ではなかなかいかないでしょう。観光とか、リゾートとかと簡単に呼んでイメージできる類のものではなく、土地の活用方法が全面的に変わっていくということしかいえません。農業とか商業とか、観光といった断面で分けるのではなく全面的に考え直していく。したがって各々がばらばらマチマチに再編成され、共生する形が変わっていく。ひとつのムラに群れて一緒に生きていた人間たちが、同じ場所で各々マチマチに生きるようになる。ムラムラからマチマチへ。そんなシステムをうち建てるのが、現在進行している変身・変態の中身なのです。

---